

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

* Blue Cross 印のついた木箱に入ったシーロスタット収蔵

この Blue Cross 印のついた木箱は乗鞍コロナ観測所から持ち帰ったと思うが記憶が定かでない。乗鞍コロナ観測所は2010年に閉所され、筆者が25 cmクーデ型コロナグラフなどを復元可能な状態で解体し、三鷹に持ち帰り天文機器資料館に一時的に保管してある。25 cmクーデ型コロナグラフの三鷹への輸送についてはアーカイブ新聞第373号、第374号に書いた。また同時に持ち帰ったものについては、第375号に「ゼンマイ式通風乾湿度計」、第376号に「振回乾湿時計」、第378号に「光柱」の写真、第379号に「10 cm コロナグラフの模型」、第380号に「長尺計算尺、普通の計算尺」、第381号に「コロナの焼き印」という記事を書いた。しかし、乗鞍コロナ観測所閉所に伴って三鷹に持ち帰ったもののリストは作成していなかったため、この Blue Cross 印のついた木箱(写真1)が乗鞍にあったものか定かでない。



写真1 Blue Cross 印のついた木箱

Blue Cross 印は昭和48年度で退官された斎藤国治教授の研究室の備品である。斎藤先生は旧分光部に所属しておられたが、分光部長であった大沢清輝教授の恒星分類の講座ができて、分光部が恒星分類部、恒星分光部に分かれ、恒星分光部の部長さんだった。この木箱にシーロスタットが入っていることは知っていた。この箱を開けた際、西野洋平氏と一緒にいたから乗鞍から持ち帰ったものと思っていたのである。今回、この箱からシーロスタットを取り出してくみ上げてみた。

箱を開いたところが写真2、3である。驚いたことにずいぶん派手な塗装がしてある。輸送箱であるから、機械は底板にベルトで固定されている。これらを取り出して、机の上

に組み立てた状態が写真4である。シーロスタットは主に太陽光を結像装置など観測装置に一定の方向に導くために用いられる。



写真2 第1鏡部



写真3 第2鏡部



写真4 組上げたシーロスタット

第1鏡は極軸の上に載っており、極軸は緯度に合わせて調整できるようになっている(写真5)。またこの極軸の駆動はゼンマイ仕掛けの駆動装置になっている。写真6、7が駆動装置を外したところである。



写真5 北緯38度に設定されている

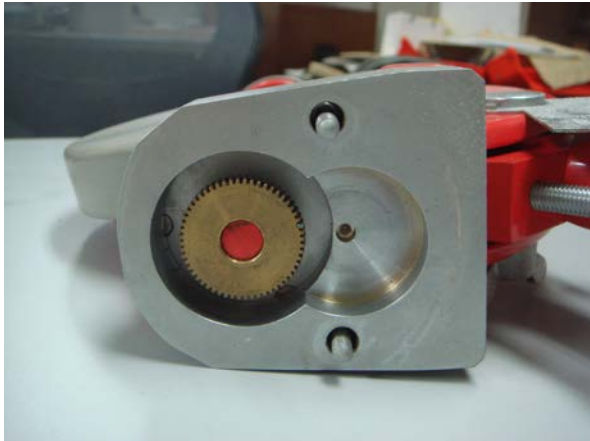


写真6 極軸側



写真7 駆動部側

写真8が、ゼンマイを巻く器具を差し込んだところである。写真9は、第1鏡の架台部で極軸方向の微調整機構と水準器がある。



写真8 ゼンマイを巻くロッド



写真9 第1鏡架台

第2鏡部のコラムには上下機構があり（写真10）、第3鏡には赤経方向と赤緯方向の微調整機構がある（写真11）。当然ながら第2鏡の角度調整・固定ネジがある。また架台にも水準器は設置されている。



写真10 第2鏡上下機構



写真11 赤経・赤緯方向の微調機構

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp